

## 1960 年代以前の女性スタッフ人名録の試み

[2023 年 2 月 3 日更新]

## 「日本の女性映画人（1）——無声映画期から 1960 年代まで」関連資料

森宗厚子（国立映画アーカイブ 特定研究員）

2023 年 2～3 月に開催の企画上映「日本の女性映画人（1）——無声映画期から 1960 年代まで」の関連資料として、監督・製作・脚本・美術・衣裳デザイン・結髪・スクリーンライター・編集などの各分野<sup>1</sup>の女性スタッフの簡易な人名録を作成した。対象として主に 1920 年代から 1960 年代前半までとし、略歴などの情報を辿れた人物を取り上げている。

通史的な観点による先行文献では、佐藤忠男が「女性の貢献」<sup>2</sup>として簡潔に日本映画史における女性映画人の歴史を概説している。しかし、いち早く戦前から多くの女性が従事してきた<sup>3</sup>結髪とスクリーンライターについては言及されていなかった。そのため、本稿では結髪とスクリーンライターに着目し、他分野でも見過ごされがちな人物の洗い出しを主眼として<sup>4</sup>、著名な人物は簡略に記している場合もある。

※本稿は「NFAJ ニュースレター」第 18 号（2022 年 10 月発行）所収「日本における女性映画人の歴史を掘り起こす 1960 年代以前の女性スタッフ人名録の試み」の増補改訂版である。（今後も適宜、改訂する予定。）

【凡例】対象として 1920 年代から 1960 年代前半までを中心に、女性層の定着が早かった分野順に並べ、分野内ではキャリア開始時期の順に記載した。

[ ]：映画での当該分野の活動時期

\*：生年や没年が不詳。無印は存命中。

目次	《結髪》	P1～
	《脚本》	P2～
	《編集》	P4～
	《記録/スクリーンライター》	P5～
	《製作》	P10～
	《監督》（長篇劇映画）	P10～
	《記録映画/文化映画/教育映画（製作・監督・脚本）》	P10～
	《美術》	P11～
	《衣裳デザイン》	P11～

## 《結髪》

## 増淵いよの [1917-1949] \*-1949

高木きくに師事し、1917 年より日活向島で女形の結髪に携わる。1920 年より松竹蒲田で女優の結髪を手がけ、1930 年に結髪係主任となり、松竹大船でも従事。（旧姓・菊地）なお、1930 年代の松竹蒲田の結髪部には、杉本しづ、遠藤末子、澤田いと、瀧田さよ、などが所属していた。

## 伊奈もと [1917-1963] 1897-1964

小学校卒業後、高木きくに師事。1917 年より日活向島で女形の結髪に携わり、1920 年から松竹蒲田で女優の結髪を手がける。1923 年に日活に移り、1934 年に結髪係主任となる。戦後は東映（東京）と契約し、多くの作品に携わった<sup>5</sup>。夫は監督の伊奈精一。（旧姓・亀田）

**木村よし子** [1928-1960年代]1913-\*

1928年に松竹下加茂に入社し、時代劇を中心に結髪に携わる。戦後も松竹京都撮影所を拠点に、『絵島生島』（大庭秀雄監督、1955年）や大曾根辰保などの時代劇および溝口健二の現代劇などを手がけた<sup>6</sup>。

**花井りつ** [1936-1961]\*\*

1930年代よりマキノトーキーで結髪に携わる。マキノトーキー解散後、1942年に大映（京都）に移り、溝口健二や伊藤大輔らの時代劇を手がける。

**石井エミ** [1937-1980] 1906-1983

1930年代より新興（京都）で結髪に従事。戦時統合に伴い1942年に大映（京都）へ移って結髪部長となり、溝口健二、衣笠貞之助らの作品に携わる。

**中尾さかゑ** [1930年代後半-1987] 1919-1997

1934年日活に入り伊奈もとに師事する。戦後は東宝の結髪部にて、時代劇から現代劇まで200本以上に携わる。第14回日本アカデミー賞特別協会賞(1991年度)を受賞。夫は、撮影監督の中尾駿一郎。

**伊奈圭子** [1954-1964] 1931-2016

東宝を中心に時代劇から現代劇まで幅広く手がけ、高峰秀子や津島恵子などを担当した。原節子は、母の伊奈もととともに親子二代で担当した。

**松本好子** [1954-1980年代]\*\*

東宝にて1950年代から結髪を手がけ、『蜘蛛巣城』（黒澤明監督、1957年）などを担当。第25回日本アカデミー賞特別協会賞(2001年度)を受賞。

## 《脚本》

### ■1920年代

**林義子** [1924-1930]\*\*

1924年に日活に入り、2月に入社第1作『雨の山寺』（小林弥六監督）が公開される。晩年の尾上松之助作品の時代劇の革新を担い、『鞍馬天狗』（高橋寿康監督、1925年）などの大作を執筆。「日本最初の女流ライター」と称された<sup>7</sup>。

**水島あやめ** [1925-1935] 1903-1990

1924年11月に小笠原プロ作品『落葉の唄』（小笠原明峰監督）により脚本家デビュー。1926年に松竹蒲田に入社し、母ものや少女ものなど全29本を執筆。会社の商業路線に違和感を抱いて大船移転を機に1935年に退社し、少女小説の作家に転じた。

**社喜久江** [1926-1936]\*\*

帝国キネマ、マキノ、東亜京都、宝塚キネマ、極東、日活などで時代劇を中心に33本以上を手がけた。代表作は、本名の内田菊子名義で執筆した『ひよどり草紙』（人見吉之助監督、1928年）。夫の塩田一も脚本や監督で活動。戦前の女性脚本家として最も多作と推定される。（別名：社喜久枝、社喜代子、内田菊子）

#### ・その他の1920年代の女性脚本家たち

松竹蒲田では、1925年に入社して1927年に幹部昇進した女優の**松井千枝子**が1927年に主演作『春の雨』（清水宏監督）『哀愁の湖』（佐々木恒次郎監督）の原作と脚本を手がけた。さらに、1928年に松竹蒲田に脚本部筆耕係として入った朝長邦子は、城戸四郎所長の目にとまって俳優部に転じて**水城邦子**を芸名として女優としてデビューするとともに、女流脚本家志望と宣伝された。そして、1930年に松竹が吸収合併した帝国キネマ長瀬撮影所に移って2本を執筆し、主演作『飾窓の中の女』（松本英一監督）にあたっては「女監督・女シナリオライターたらんと修行の傍、女優もやろうと云う八面六臂の<sup>8</sup>」と宣伝され

たが、1930年以降の消息は不明。

他にも1920年代後半には、**塚本美代子**（1925-26年に日活教育映画部で三枝源次郎作品6本執筆）、**小滝すみ子**（1925-30年に帝国キネマや河合町屋などで松本英一作品7本を執筆）、**京屋静子**（1927-29年に帝国キネマで深川ひろし作品7本を執筆）などの記録がある。

## ■1930年代

**鈴木紀子** [1933-1941] 1909-1985

石川県能美郡寺井町（現・能美市）出身。東京帝国女子専門学校卒業後、松竹映画脚本研究所を経て1931年に不二映画入社。1933年に日活太秦に入って1934年に日活多摩川に移り、日活では全20本を執筆。1938年に石川秋子名義で東宝作品『チョコレートと兵隊』（佐藤武監督）を手がける。1939年に東宝に正式移籍後、『花つみ日記』（石田民三監督、1939年）など4本を書き、1941年の東京発声作品『女学生記』（村田武雄監督）が最後の脚本作となった。『東宝十年史』（1942年）によると、戦前の東宝所属の唯一の女性脚本家。製作本数が制限された1940年代には紙芝居やラジオドラマなどを手がけたが、1945年春に病身となり帰郷した。戦後は地元を拠点として、ラジオドラマや演劇脚本を書いた後、婦人運動を牽引して全国地域婦人団体連絡協議会石川支部の要職を務めた。（本名・鈴木紀）

**森山季子** [1938-1940] \*\*

松竹シナリオ研究所第4期生を経て1936年に松竹に入社した。戦前の松竹大船所属の唯一の女性脚本家。クレジット作品の現存は『わが家に母あれ』（渋谷実監督、1938年、原作）と『母を讃へる歌』（原研吉監督、1939年、野田高梧と共同脚本）。森山季の名義による脚本作品2本はフィルムが現存していない。

### ・その他の1930年代の女性脚本家たち

1930年代には他にも、極東キネマにて1936～1937年に『呪のまだら猫』（小倉八郎監督、1937年）などの若年層向け娯楽映画を4本を執筆した**高原雪絵**などがいた。

## ■戦後

**水木洋子** [1949-1982] 1910-2003

戦前より戯曲やラジオ脚本を書き、八住利雄に師事して1949年に映画脚本家デビュー。文芸メロドラマと社会派路線の二系統で全35本を書き、日本を代表する脚本家の一人として高く評価された。

**和田夏十** [1949-1988] 1920-1983

戦後、東宝撮影所で通訳に従事。1948年に結婚した市川崑に勧められ、脚本を書き始める。1949年から「和田夏十」名義を夫婦共同ペンネームとして、1951年以降は単独ペンネームとして、主に市川崑作品を執筆。（本名・市川由美子）

**橋田壽賀子** [1950-1958/1967-1984] 1925-2021

松竹シナリオ研究所第6期生を経て1949年に松竹に入社し、戦後デビューの新進脚本家の一人として注目された。1959年に秘書課へ異動を命じられたため退社し、以降はテレビで活躍。

**田中澄江** [1951-1967] 1908-2000

戦前より戯曲を書き、芸能記者などを経て、1951年より脚本を執筆。女性映画を得意とし、1960年代以降はテレビや小説でも活躍。

**西沢裕** [1952-1982] 1929-\*

1952年松竹シナリオ養成所修了。1955年に日活脚本部に入り、その後フリーになる。八木保太郎に師事した。（別名：西沢裕子）

**楠田芳子** [1954-1973] 1924-2013

実兄である木下恵介とコンビの撮影監督・楠田浩之と結婚後、1954年に脚本家デビューしてコンスタントに書く。1965年に木下恵介プロダクションに参加し、1970年以降はフリーでテレビを中心に執筆。

**鷹沢和善** (高松富久子) [1958-1962] 1921-1990

映画人一家に生まれた高松富久子は、1940年に東京発声に入ってスクリプターとなり、吸収合併により東宝を経て、争議後は新東宝に移り渡辺邦男監督に重用されたが、沢島忠との結婚に伴い離職して、夫婦共同ペンネーム「鷹沢和善」により沢島忠監督作品25本の脚本を執筆した。

**宮内婦貴子** [1963-1986] 1933-2010

シナリオ作家協会のシナリオ研究所で学び、東宝シナリオ研究生を経て、日活と契約して1963年に脚本家デビュー。1965年以降はテレビを中心に活躍した。

**服部佳** [1965-1979] 1932-2020

脚本家を志望していたが、早稲田大学卒業後に1955年に日活に入社してスクリプターとなる。『嵐を呼ぶ男』（井上梅次監督、1957年）など8年間で39本を担当後、脚本部に移籍。直居欽哉に師事して、服部佳の名義で脚本家となり、大映作品『忍びの者 伊賀屋敷』（森一生監督、1965年）でデビュー。1968年以降はフリーとして、映画・テレビ・演劇で活躍した。脚本作品に『刺青一代』（鈴木清順監督、1965年）『霧の旗』（西河克己監督、1977年）『あゝ野麦峠』（山本薩夫監督、1979年）など。（別名：服部佳子）

**大野靖子** [1966-1983] 1928-2011

高校卒業後に店員や事務員などで働きながら演劇に参加し、三好十郎に師事。1962年よりテレビ各局でドラマ脚本を書く。フジテレビで組んでいた五社英雄の映画進出に伴い、1966年から映画脚本も手がける。向田邦子、橋田壽賀子と並んでテレビでの女性脚本家の地位を築き、映画では時代劇や文芸作から大作まで執筆。

・その他の1950年代の女性脚本家たち

『女の暦』（久松静児監督、1954年、井出敏郎と共同脚本）を執筆した**中河百々代**、『ノンちゃん雲に乗る』（倉田文人監督、1955年、倉田文人と共同脚本）を執筆した**村山節子**などがいた。

《編集》

**岸富美子** [1936-1962] 1920-2019

1936年に第一映画社で編集助手となり、J.O.スタジオに移り『新しき土』（伊丹万作／アーノルド・ファンク監督、1937年）に参加。日活などを経て、1939年に満洲映画協会に入り、戦後は満映跡地に開設された東北電影製片廠にて編集を指導。1953年に帰国後、独立プロや教育映画などの編集に携わる。

**井出玉江** [1939-1940] \*\*

東宝で成瀬巳喜男、山本薩夫、伏水修など6本の編集を担当した。『東宝十年史』（1942年）によると、戦前の東宝所属の唯一の女性編集者。1950～1960年代に読売映画社にて文化映画の監督・脚本・編集などを手掛けた。

**杉原よ志** [1943-1988] 1912-2001

1930年に松竹蒲田に入社、松竹大船にて1943年に編集技師に昇進し、1947年に編集課課長となる。1956年以降は編集技師に戻り、1988年まで松竹作品の編集に携わる。（旧名：芳子）

**大沢しづ** [1949-1977] 1922-\*

1938年松竹に入社して杉原よ志に師事。テンポの速いコメディが身上の番匠義彰作品を数多く担当したこと

をはじめ、1960年代のプログラム・ピクチャーを支えた。<sup>9</sup>（別名：静子、しづ子、及川しづ）

**神島歸美** [1949-1980年代]\*\*

新東宝にて1949年から1962年まで52本を担当、その後はフリーで活躍した。（別名：歸美、歸美、歸美子、歸美子）

**沼崎梅子** [1953-1993] 1916-2000

1936年にP.C.L.に入社してスクリプターとなり、東宝にて1943年に編集に転じた後、結婚退社。1947年に編集助手として東宝に復帰。1953年にフリーとなり、独立プロの長篇劇映画や桜映画社の短篇など数多くの編集に携わり、多くの後進を育てた。<sup>10</sup>（旧姓・豊島）

**南とめ** [1953-1996] 1910-2004

1933年P.C.L.録音部にスクリプターとして入社して、1940年にフリーとなる。1953年より東京映画でネガ編集の専従として、600本以上を担当。<sup>11</sup>（NFAJでは南の旧蔵資料を所蔵）

**武田うめ** [1956-1985] 1921-\*

1941年新興キネマの編集整理室に入り、1942年日本映画社に移りニュース映画の編集に携わる。1951年に東宝に出向して編集助手となり、1956年に編集技師になる。稲垣浩作品やクレージーキャッツ映画など東宝で数多くの作品を担当し、1973年よりフリーとして活躍した。<sup>12</sup>

**守随房子**[1956-1991]\*\*

1954年頃から山本薩夫などの独立プロ作品に編集助手として携わり、『生きていてよかった』（亀井文夫監督、1956年）の編集を共同で務め、記録映画および勅使河原宏監督の『おとし穴』（1962年）『砂の女』（1964年）『サマー・ソルジャー』（1972年）などの編集を担当した。

《記録/スクリプター》

■戦前（トーキー黎明期）：第一世代

**坂井羊子** [1932-]1907-\*

東洋大学卒業後、松竹脚本研究所を経て、1931年11月に松竹蒲田のトーキー部に入社し、日本最初の女性スクリプターと推定される。『上陸第一歩』（島津保次郎監督、1932年）や『婦系図』（野村芳亭監督、1934年）などに携わる。

**市原直子** [1934]\*\*

入江プロ第1回トーキー『雁来紅（かりそめのくちべに）』（鈴木重吉監督、1934年）に「記録」としてクレジットされており、トーキー黎明期に女性がクレジットされた貴重なケースである。なお、「日本撮影所録」（キネマ旬報、1931～1940、4月1日号）では記録係/スクリプターとして、1934年に太秦発声の笹木一子が初めて記載され、1936年には新興（東京）の鈴木智恵子と太秦発声の小出ふみ子（1937年にはJ.O.所属）が記載された（三者がクレジットされたフィルムの現存は確認されていない）。

■戦前（トーキー隆盛期）：第二世代

**津村典子** [1936-1948]\*\*

1936年マキノトーキー入社、スクリプターとして久保為義やマキノ正博の作品に携わる。マキノ解散後、1938年に新興キネマ（京都）に入り、戦時統合以降は大映（京都）にて野淵昶、木村恵吾、森一生などの作品を担当。1948年、結婚した森一生の要望により離職した。<sup>13</sup>（別名：森典）

**石山一枝** [1937-1951] 1917-1999

1937年にP.C.L.入社、吸収合併により東宝へ。スクリプターとして、熊谷久虎、山本嘉次郎、斉藤寅次郎、佐藤武、渡邊邦男らの作品を担当。1942年より文化映画部で編集を手がける。戦後は東宝教育映画にて編集

に携わり、同社で 1951 年に『産業科学映画大系 化学せんい』を監督した。<sup>14</sup> 戦前より通名として「石山まり」を使用し、戦後に菅家陳彦との結婚により改姓し、後に、かんけまり名義で文化映画の演出や脚本で活動。

**植村よし子** [1937 年頃-1977] \*\*

戦前に P.C.L.に入社し、吸収合併により東宝へ。1950～60 年代に東宝のプログラム・ピクチャーの数々を支え、1970 年代以降はフリーで活動した。

**大内小枝子** [1930 年代-1968 年頃] \*\*

戦前に P.C.L.にてスクリプターとなり、東宝で戦後にも従事し、1949 年頃に東映（東京）に移る。宮本衣子から小貫繁子や高岩禮子まで多くの後輩を育て、主任格として作品担当を決める差配もした。主に、大内は新進監督に携わり、ベテラン監督は宮本や若手スクリプターに割当てられていたという。

**藤本文枝** [1938-1981] 1912-2003

速記者として検閲台本を作成したことをきっかけに、新興キネマ（京都）でスクリプターとなる<sup>15</sup>。牛原虚彦作品などに携わり、戦時統合により大映（京都）へ。戦後に『壮士劇場』（1947 年）から稲垣浩に付き、東宝入り後も引き続き、全 44 本の稲垣作品を手がける。稲垣の独立プロ作品『忘れられた子等』（1949 年）では助監督として携わる。

**鈴木伸** [1940-1960 年代] 1919-\*

1939 年東宝入社、東宝争議後はフリーで新東宝にて巨匠の作品に携わるとともに後進を指導。1950 年には新東宝で『細雪』（阿部豊監督）、『宗方姉妹』（小津安二郎監督）、『雪夫人絵図』（溝口健二監督）などを担当<sup>16</sup>。1960 年代には宝塚映画で、『小早川家の秋』（小津安二郎監督、1961 年）、『放浪記』（成瀬巳喜男監督、1962 年）も担当した。

**城田孝子** [1940-1987] 1918-1990

1939 年に PCL 入社、編集助手を経て 1940 年にスクリプターとなる。入社当時、東宝のスクリプターは 8 名いたという（他に、植村よし子、矢口良江、菊池雪江、豊島梅子、石山まり、鈴木ノブ、本多きみ）。戦時中は山本嘉次郎作品などに携わったが、戦後に東宝争議により退社してフリーとなる。1950 年に、フリーの互助組織として「東京スクリプター協会」を中尾寿美子、上田圭子、片山全子、中川芳子、君塚峯子とともに発足させる。1950 年代以降は独立プロ作品を数多く手がけ、1960 年代から教育映画にも携わる。1971 年に『結婚する娘へ —父の愛』を監督した。<sup>17</sup>

**田口靖子** [1940 年頃-1959] 1920-\*

戦前に京都の撮影所にてスクリプターとなり、1943 年頃に東宝（東京）に移る<sup>16</sup>。『四つの恋の物語』（1947 年）を皮切りに成瀬巳喜男に付いた、成瀬組の名スクリプター。

**三森逸子** [1940-1974] 1920-\*

1939 年に新興キネマ（東京）に入社し、伊奈精一、久松静児、小石栄一などの作品に携わる。戦時統合で大映（東京）へ移籍し、戦後に結婚退職を経て、1954 年にフリーとして復帰。新東宝で小森白や近江俊郎、小林悟などの作品を担当し、独立プロや東映教育映画にも数多く携わる。新東宝ではスクリプターは全員契約者として、1950 年代に鈴木ノブ、笹平美江子、木下敏子、山岸珠子、酒井澄子、菱田和子、1960 年代には酒井やす子（泰子）などがいた。なお、三森の証言によると、新興キネマ（東京）での女性スクリプター第一号は久慈孝子（[1938-1939] \*-1944）とのこと。<sup>18</sup>（旧姓・牧田）

**古川八千恵** [1941-1950 年代] \*\*

1941 年新興キネマ（東京）に入社して田中重雄などの作品に携わり、戦時統合により 1943 年に大映（東京）へ。戦後は『静かなる決闘』（黒澤明監督、1949 年）、『どぶろくの辰』（田坂具隆監督、1949 年）、『自由学校』

(吉村公三郎監督、1951年)などを手がける。1951年当時の大映にはスクリーンライターが8名おり、キャリア10年となる古川はベテランと見なされ、外部監督を担当することが通例となっていた。<sup>19</sup>

### ■戦後(1940年代デビュー):第三世代

**田中美佐江** [1946-2007] 1930-2018

1946年に松竹下加茂撮影所に入り、1947年に東横映画(現・東映)に同社初のスクリーンライターとして引き抜かれる。東映京都撮影所にて、マキノ雅弘、松田定次、深作欣二など監督40名以上の200本以上に携わる<sup>16</sup>。父は新興キネマなどで活躍した撮影監督の高橋武則、夫は大映(京都)の撮影部で活躍した田中省三。(旧姓・高橋)

**藤下綾子** [1947-1950年代] 1917-\*

1945年7月に大映(東京)経理課に入社し、人手不足により12月にスクリーンライターに転じ16、『花咲く家族』(千葉泰樹監督、1947年)で一人立ちし、島耕二作品などに携わる。

**中尾壽美子** [1947-1968] 1921-\*

撮影監督である兄・中尾駿一郎から映画界入りを反対されたものの、1946年に求人公募により東宝入社。『酔どれ天使』(黒澤明監督、1948年)などを担当したが、東宝争議により退社した。以降フリーで新藤兼人など独立プロ作品に多く携わり、1980年代以降は千代田学園で後進の指導にあたった。<sup>21</sup>

**秋山みよ** [1947-1981] 1924-2014

東京女子大学卒業後に女学校教師を経て、1947年大映(京都)に入社。伊藤大輔作品などで見習い後、1948年以降は衣笠貞之助の多く作品を支えた他、吉村公三郎、マキノ雅弘、久松静児などの作品に携わる。1954年、製作再開した日活にスクリーンライターの筆頭として引き抜かれ、後進を指導するとともに、石原裕次郎や吉永小百合などの出演作を担当。1981年にプロデューサーに転じ、『犯され志願』(中原俊監督、1982年)などを送り出した。<sup>16</sup>22 なお、1954年の日活製作再開時、他社からスクリーンライターを引き抜き、秋山はじめ、飯村知子、堀北昌子、土屋テル子、君塚みね子、新関良子、**木村雪恵**、中川初子、服部佳子、桑原みどりという10人体制で始動した。

**河辺美津子** [1947-1999] 1926-2014

1943年に東宝入社、編集助手となる。最初期の新東宝に移り、スクリーンライターとなる。『グッド・バイ』(島耕二監督、1949年)『春の戯れ』(山本嘉次郎監督、1949年)など、様々な監督の作品に携わる16。新東宝解散後は国際放映に移籍し、その後はフリーとして、相米慎二作品などに参加。

**小林日出** [1948-1983] \*\*

1948年大映(東京)に入社し、吉村公三郎などの作品を担当。大映倒産後はフリーとして、黒木和雄作品などに携わる。(旧姓・堀本)

**山崎慎子**[1948-19]\*\* \*\*

1948年大映入社。衣笠貞之助などの作品に携わる。

**片山全子** [1948-1956] \*\*

脚本家志望だったが受け入れ先がなく、1948年東宝に入社してスクリーンライターになる。『女の四季』(豊田四郎監督、1950年)『また逢う日まで』(今井正監督、1950年)などを担当後にフリーとなり、五所平之助の独立プロ作品に携わる。『わかれ雲』(1951年)では看護婦役で出演もした。16(別名:板谷全子)

**君塚みね子** [1948-1994] 1931-2014

1948年東宝に入社してスクリーンライターとなる。1954年に日活に引き抜かれ、『愛と死の谷間』(五所平之助監督、

1954年)や中平康などの作品を担当したほか、白鳥あかねなど後進を育てた。1964年に日活退社後はフリーで活躍した。(別名：峯子)

**宮本衣子** [1949-1998] 1924-2014

日本成蹊女子大卒業後に文部省勤務を経て、1947年に大泉スタジオ入社。管財課での勤務を経て、1949年にスクリーンライターに転じる。吸収合併後は東映にて、『飢餓海峡』(内田吐夢監督、1964年)や石井輝男、マキノ雅弘などの任侠作品を多く担当したほか、『Wの悲劇』(1984年)など澤井信一郎作品に携わった。<sup>23</sup> 東映にて、後進として宮腰千代や佐伯桂子など多くのスクリーンライターを育てた。

**飯村知子** [1940年代末頃-1986]\*\*

東映に入社してスクリーンライターとなる。1954年に日活に引き抜かれ、田坂具隆や川島雄三などの作品を手がけた。夫は、東映の撮影監督の飯村雅彦。

#### ■戦後(1950年代以降デビュー)：第四世代

**野上照代** [1950-1971] 1927-

都立家政女学校卒業後に出版社勤務を経て、1949年大映に入り木村恵美に師事。1950年に『復活』(野淵昶監督)で一人立ちして『羅生門』で初めて黒澤明に付く。1951年に東宝に移り、様々な監督の作品に携わり、『生きる』(1952)以降の全ての黒澤作品を担当<sup>24</sup>。『デルス・ウザーラ』(1975年)からは協力監督やプロダクション・マネージャーとして参加した。

**堀北昌子** [1950-2012] 1930-

1950年大映(京都)に入社し、森一生などの作品に携わる。1954年に日活に引き抜かれ、滝沢英輔や中平康などの作品を担当。1972年に日活を退社し、三船プロと専属契約する。1984年以降は、フリーとして伊丹十三作品などを手がける。1992年創立の日本映画スクリーンライター協会(現・協同組合 日本映画・テレビスクリーンライター協会)の初代会長を務めた。<sup>25</sup>

**新関良子** [1951-1976]\*\*

1951年頃に大映(京都)に入社してスクリーンライターとなり、『怪談佐賀屋敷』(荒井良平監督、1953年)などを担当。1954年に日活に引き抜かれ、『勝利者』(井上梅次監督、1957年)『錆びたナイフ』(舛田利雄監督、1958年)『月曜日のユカ』(中平康監督、1964年)に携わり、1970年代以降はロマンポルノ作品や児童映画も担当した。

**土屋テル子** [1952-1983]\*\*

東宝に入社し、『愛人』(1953年)で初めて市川崑に付き、1954年に日活に引き抜かれ、以降も市川作品を担当。1957年に再び東宝に戻り『細雪』(1983年)までの市川作品に携わった。『幸福』(1981年)では編集を手がけた。

**奈良井玲子** [1952-1960年代]\*\*

1952年頃に新東宝に入社し、鈴木ノブに師事。『地獄』(中川信夫監督、1960年)などを担当。

**梅津泰子** [1953-1996] 1930-2013

東映京都撮影所にて、1953年頃から佐々木康、加藤泰、内田吐夢、マキノ雅弘、中島貞夫などの作品に付く。

**中井妙子** [1953-1998] 1930-\*

1953年に大映(京都)に入社して衣笠貞之助作品に携わり、『炎上』(1958年)を皮切りに市川崑作品を手がけた他、『釈迦』(三隅研次監督、1961年)を担当した。<sup>26</sup> 1965年に東京撮影所に移籍し、以降は大映テレビ作品に従事した。

**桑原みどり** [1954-1998] 1926-\*

1954年より日活に所属し、スクリーンライターとして鈴木清順作品などに携わる。1972年からフリーとなり、『檜



山節考』(今村昌平監督、1983年)などを担当。

**中川初子** [1955-1983] \*\*

1954年に日活に入り、『豚と軍艦』(今村昌平監督、1961年)『赤いハンカチ』(舛田利雄監督、1964年)などに携わり、1970年代以降はロマンポルノ作品も担当した。

**白鳥あかね** [1956-2004] 1932-

早稲田大学卒業後、『狼』(新藤兼人監督、1955年)で中尾寿美子と前嶋(渋谷)昶子のもと見習いを経験。1955年日活に入社し、秋山みよと君塚みね子に師事。1956年以降、数多くの作品に携わる。1980年退社後はフリーとして若手作品も含めて幅広く活躍し、1992年にスクリーンライター協会設立に尽力した。『隠し妻』(小沼勝監督、1972年)を皮切りに脚本も執筆。<sup>2728</sup>

**吉田栄子**[1956-2000] 1933-\*

宝塚映画を経て1960年にフリーとなり、山本薩夫や小林正樹などの作品にスクリーンライターとして携わり、1970年代以降は主に編集として勅使河原宏などの独立プロ作品に携わった。

**石田照** [1957-1987] 1932-\*

同志社大学卒業後、1955年頃に東映(京都)に入社し、加藤泰、松田定次、マキノ雅弘などの作品に携わる。『丹波哲郎の大霊界 死んだらどうなる』(1989年)を監督した。

**塚越恵江** [1958-?] 1933-

東映(京都)にて、1950年代頃から沢島忠、マキノ雅弘、加藤泰、工藤栄一などの作品に携わる。(旧姓:神田)

**斎藤能子** [1958-20\*\*] 1937-2014

東映教育映画部を経て、フリーになり東宝、独立プロ、松竹、東映などの多くの作品を担当した。

**大和屋叡子** [1958-2003] \*\*

日活にてスクリーンライターとなり、藏原惟繕や長谷部安春などの作品に携わり、972年以降はフリーとなる。夫は脚本家・監督の大和屋竺。

**鈴木圭子** [1959-1970] 1937-\*

1958年東宝入社、1959年以降は円谷組のスクリーンライターとして特撮パートの記録を担当した。<sup>29</sup> (旧姓・久松)

**梶山弘子** [1960-1997] 1936-

1960年宝塚映画に入社して吉田栄子に師事、1968年東宝へ移籍して小林正樹作品などに携わる。1981年以降はフリーで活動し、1992年にスクリーンライター協会設立に尽力した。<sup>30</sup> 田中絹代が1949年渡米時に撮影したプライベート・フィルムを発見して、その素材を編集して『田中絹代の旅立ち―占領下の日米親善芸術使節』(2009)を製作した。田中絹代や小林正樹および久松静児についての資料整理や顕彰を行ない、私設映画図書館「弘子文庫」を栃木県那須に開設した。

**高岩<sup>れいこ</sup>禮子**[1963-1990年代] \*-

東映(東京)に入社し、東宝出身の大内小枝子に師事。『五番町夕霧楼』(田坂具隆監督、1963年)で一本立ちし、石井輝男や村山新治などの作品に携わる。<sup>31</sup> (旧姓・佐々木)

**宍倉徳子** [1961-1963] \*-

日活に入社してスクリーンライターとなり、『競輪上人行状記』(西村昭五郎監督、1963年)などを担当。日活退社後はフリーとなる。1979年に『ウルトラマン 怪獣大決戦』を監督し、その後はプロデューサーに転じて、『ヴァージニア』(佐藤嗣麻子監督、1993年)、『D坂の殺人事件』(実相寺昭雄監督、1998年)などの製作に携わる。

## 《製作》

**岡田嘉子** [1930] 1902-1992

1919年に新劇女優としてデビューし、1923年に日活向島で映画初出演して無声映画からトーキーでも引き続き活躍。1930年に家庭用16mmトーキー映画専門の岡田嘉子プロダクションを設立し、自らの主演による短篇小唄映画を製作。

**入江たか子** [1932-1937] 1911-1995

1927年に日活に入り女優デビュー。1932年に日活を退社し、新興キネマと提携して入江ぷろだくしょんを設立し、自らの主演作を製作。入江ぷろは提携先を日活そしてP.C.L.に移した後、1937年に解散した。

**水の江瀧子** [1955-1970] 1915-2009

松竹歌劇団の男役として1930年代に国民的人気を博し、1942年に退団後は劇団主宰や映画出演で活動。1954年にプロデューサーとして日活と契約し、1970年まで76本を製作した。

**宮古とく子** [1958-1982] 1924-

新星映画社を経て、1955年山本プロ設立に参加し、山本薩夫作品を製作。<sup>32</sup>

**渡辺美佐** [1962-1964] 1928-

芸能事務所「渡辺プロダクション」の副社長として、1960年代に東宝と提携して映画製作に携わる。

## 《監督》(長篇劇映画)

**坂根田鶴子** [1936-1943] 1904-1975

1929年に日活太秦で溝口健二の監督助手となり、溝口の移籍に伴って複数社を経て、1936年に第一映画社作品『初姿』で日本初の女性監督となるが、冷遇を受ける。1942年に満洲映画協会に入社して啓民映画に携わり、1946年に帰国。戦後は松竹京都撮影所にてスクリーンライターや編集に従事。再び監督する希望は叶わなかった。

**田中絹代** [1953-1962] 1909-1977

1924年に映画初出演し、戦前から戦後にかけて日本を代表する女優の一人として活躍する傍ら、1953～62年に6本を監督。

## 《記録映画/文化映画/教育映画(製作・監督・脚本)》

**厚木たか** [1942-1982] 1907-1998

1930年日本プロレタリア映画同盟に参加。1934年にP.C.L.文芸課に入り、本名の深町松枝名義で『処女花園』(矢倉茂雄監督、1936年、田中千禾夫と共同脚本)により劇映画の脚本家デビューした。1938年より、芸術映画社に勤務の傍ら記録映画のシナリオを執筆。1941年『或る保姆の記録』の構成を手がけたほか、ポール・ローサの著書を翻訳した「文化映画論」(1938)により大きな影響を与えた。

**中村麟子** [1951-1989] 1916-2009

1944年日本映画社に入社。1952年日映科学映画製作所に移り、40本以上を演出。1972年にフリーとなって以降も多くの文化映画・教育映画を監督した。(NFAJでは中村の旧蔵資料を所蔵)

**岡野薫子** [1951-1963] 1929-2022

日映科学映画製作所にて科学映画や教育映画の脚本を多数執筆した<sup>33</sup>。1964年からは児童文学の作家として活躍。<sup>25</sup>

**時枝俊江** [1953-1997] 1929-2012

1951 年岩波映画製作所に入社し、児童教育映画をはじめとする幅広い分野で 100 本以上を監督。1984 年にフリーとなり、地域医療などをテーマにしたドキュメンタリーを撮り続けた。

**かんけまり** [1953-1975] 1917-1999

1937 年東宝のスクリプターとなり、1942 年に東宝系列の航空資料製作所に移籍。東宝争議により、1948 年に東宝教育映画部に移り、編集や演出補佐に携わる。1953 年同社解散後はフリーで教育・文化映画の演出・脚本・編集を手がける。(旧名：石山一枝)

**西本祥子** [1954-1984] 1931-\*

1954 年に日本視覚教材に入社、教育映画の脚本・編集・監督を手がける。後に読売映画社に移る。

**杉原せつ** [1956-1975] 1917-2022

1940 年頃に日本映画社に入り、ニュース映画部を経て短篇の助監督となる。戦後はフリーとして、記録映画の脚本や演出に携わる。単独監督作『生まれる』(1966 年)『4500 人の陽気な女房たち』(19\*\*年)などの他、共同脚本作として『鳥獣戯画』(松川八洲雄監督、1966 年)に参加。1976 年以降は絵本作家に転じた。

**羽田澄子** [1957-2012] 1926-

1950 年岩波映画製作所に入社して 1957 年以降 80 本以上を監督。1981 年にフリーとなり、製作者・工藤充とのコンビにより長篇を中心に精力的に作品を発表。

**望月優子** [1960-1962] 1917-1977

1930 年から様々な舞台に出演し、戦後は劇団民藝に所属して 1948 年に映画初出演。女優として活躍しながら、1960～62 年に教育映画 3 本を監督した。

**藤原智子** [1960/1992-2008] 1932-2018

1955 年に新理研映画に入り、日本映画新社を経て 1960 年に監督デビュー。記録映画のシナリオを数多く手がけた後、1981 年に監督に復帰。1990 年代以降は女性史を題材として記録映画を撮り続けた。

**渋谷昶子** [1963-2012] 1932-2016

1954 年にスクリプターとなった後、1961 年よりテレビや PR 映画等の企画、脚本、演出に携わる。1964 年に監督作『挑戦』でカンヌ国際映画祭短篇部門グランプリ受賞。以降も TV や自主製作などで活躍。

**神保まつえ** [1958-]\* 1928-\*

1953 年に学習研究社に入社。小学校向け視聴覚教材としての人形アニメーション作りにアニメーターや演出家として携わり、1966 年以降は主にプロデューサーとして渡辺和彦や岡本忠成らの作家と組んで受賞作を多数送り出した。1980 年代からフリーとしてテレビ作品などで活躍。

## 《美術》

**村木忍** [1953-1993] 1923-1997

東宝映画文化映画部を経て、1945 年に東宝に移り松山崇の助手となる。1953 年以降、美術監督としてプログラム・ピクチャーを支え、市川崑作品や夫の村木与志郎ともに参加した黒澤明作品でも知られる。

## 《衣裳デザイン》

**森英恵** [1954-2003] 1926-2022

服飾デザイナーとして 1951 年にオーダーメイド洋装店を開き、1954 年より日活や松竹を中心にノンクレジット作品も含め数百本に携わる。

柳生悦子 [1956-1988] 1929-2020

東京芸大在学中より松山崇に師事し、東宝の美術部に入る。1956年から衣裳デザイナーとして100本以上を手がける。『日本海大海戦』(丸山誠治監督、1969年)の担当をきっかけに、軍装研究を行なう。(註26)

※本稿の作成にあたって、協同組合日本映画・テレビスクリプター協会の諸氏、および谷慶子氏の御協力をいただいた。

《主要参考文献/ウェブサイト》

- ・「日本映画人大鑑」(キネマ旬報別冊)キネマ旬報社、1959年。
- ・佐藤忠男編「日本の映画人：日本映画の創造者たち」日外アソシエーツ、2007年。
- ・「日本映画における女性パイオニア」<https://wpjc.h.kyoto-u.ac.jp/>(科研究費研究「日本における女性映画パイオニア：フェミニスト映画史の国際的研究基盤形成」ウェブサイト)
- ・「日活 公式サイト>作品データベース」<https://www.nikkatsu.com/search/>
- ・「東宝 公式サイト>映画>映画資料データベース」<https://www.toho.co.jp/movie>

<sup>1</sup> 録音・照明・音楽の各分野では、調べた限りでは1960年代前半までに活動した女性は見当たらなかった。音楽では、日本の女性作曲家の先駆けとなった沖縄出身の金井喜久子(1906-1986)が、大映の製作協力によるアメリカ映画『八月十五夜の茶屋(The Teahouse of the August Moon)』(ダニエル・マン監督、1956年)に沖縄音楽の監修として参加している。

<sup>2</sup> 佐藤忠男『日本映画史I』岩波書店、1995年、87-88頁。

<sup>3</sup> 結髪では無声映画期から女性たちが活躍しており、また、トーキー映画期に登場したスクリプターはクレジットされない場合も多かったが製作の中核を支える役割を果たしてきた。スクリプターについては、1936年に年間製作本数の約半数がトーキーとなった時点で、すでに女性層が定着していた。典拠として「改訂版映画用語辞典」(キネマ旬報1936年4月1号)に、「スクリプト・ガール Script Girl: 撮影の状態を細大洩らさず、監督の傍らで記入する人をスクリプター-Scripterと云い、通常この仕事には女性が当ることが多く、それをスクリプト・ガールという。」と記載されている。1930年代末には製作本数の増大に伴って各撮影所で所属スクリプターを複数人抱えるようになっており、「日本撮影所録」(キネマ旬報、1938年4月1日号)によると1938年には新興(東京)ではスクリプト係8名が在籍しており、男女比は不詳だが女性を主としていたと推定される。なお、スクリプターの職種が確立された1930年代後半から女性が主力となった点は目立った特色であるが、男性に従事することも皆無ではなく、戦前の日活太秦では男性スクリプターが配置され、戦後も含めて松竹大船では助監督が記録を担当していた。また、戦後に東宝や宝塚映画においても男性が記録に従事した事例もある。

<sup>4</sup> 池川玲子「「映像と戦争」についての研究史」『Image & Gender: イメージ&ジェンダー研究会機関誌』第5号 彩樹社、2005年3月、21頁。

<sup>5</sup> 伊奈もと『髪と女優』日本週報社、1961年。

<sup>6</sup> 「映画に生きる 結髪係 小林よし子」キネマ旬報278号、キネマ旬報社、1961年6月、59頁。記事タイトルの「小林よし子」という記載は誤記であり、記事本文には「木村よし子」と記載されている。

<sup>7</sup> 脚本家 林義子『日本映画俳優名鑑 昭和四年版』映画世界社、1928年(ゆまに書房、2005年復刻版、162頁)

- 8 読売新聞 1930年4月29日朝刊6頁
- 9 及川しづ子インタビュー、森田郷平・大嶺俊順編 『思ひ出 55話 松竹大船撮影所』集英社、2004年、116-119頁。
- 10 沼崎梅子インタビュー、『編集者自身を語る』日本映画編集協会、1993年、289-307頁。
- 11 南とめインタビュー、『編集者自身を語る』日本映画編集協会、1993年、331-338頁。
- 12 武田うめインタビュー、『編集者自身を語る』日本映画編集協会、1993年、218-230頁。
- 13 「聞き書き 記録係(スクリプター) 森 典」『FB：映画研究』1号、行路社、1993年、29-60頁。
- 14 石山一枝「人の知らないこの労苦 撮影所ルポルタージュ」『映画朝日』朝日新聞社、1940年7月号、100頁。「スクリプター生活を経て」『働く婦人』13号、日本出版、1948年4月、16-19頁。
- 15 梶山弘子「藤本文枝」『姉妹たちよ 女の暦 The First Feminists in Japan』ジョジョ企画、2011年。
- 16 「スクリプトガール告知板」『アサヒグラフ』(1952年4月16日号、20-21頁)所収の鈴木ノブ、田口靖子、藤下綾子、秋山みよ、河辺美津子、片山全子の項を参照した。
- 17 城田孝子、廣澤榮「スクリプターの47年」『講座日本映画 5 戦後映画の展開』、岩波書店、1987年、252-265頁。
- 18 三森逸子インタビュー「新東宝大蔵時代研究(第7回)近江俊郎の"いいかげん"演出術」『映画論叢』38号、国書刊行会、2015年、78-91頁。
- 19 古川八千恵インタビュー『映画世界』、映画世界社、1951年4月1日号、27頁。
- 20 田中美佐江インタビュー「<聞き書き>記録 田中美佐江」『FB：映画研究』第12号、行路社、1998年、91-116頁。
- 21 中尾壽美子インタビュー 桂千穂(聞き書き)『スクリプター：女たちの映画史』日本テレビ放送網、1994年、169-242頁。
- 22 秋山みよインタビュー 桂千穂(聞き書き)『スクリプター：女たちの映画史』日本テレビ放送網、1994年、7-94頁。
- 23 宮本衣子インタビュー 桂千穂(聞き書き)『スクリプター：女たちの映画史』日本テレビ放送網、1994年、95-168頁。なお、宮本衣子の生年「大正10年」という記載は誤記であり、正しくは「大正13年」(1924年)である。
- 24 野上照代『もう一度天気待ち 監督・黒澤明とともに』草思社、2014年。
- 25 堀北昌子インタビュー『映画人が語る 日本映画史の舞台裏[撮影現場編]』森話社、2021年、179-203頁。
- 26 中井妙子インタビュー「パフォーマーを支える人たち」『パフォーマー』(出版社名不明)、1992年春号 vol.17、10-11頁。
- 27 白鳥あかねインタビュー 桂千穂(聞き書き)『スクリプター：女たちの映画史』日本テレビ放送網、1994年、243-326頁。
- 28 白鳥あかね『スクリプターはストリッパーではありません』国書刊行会、2014年。
- 29 鈴木桂子インタビュー『ゴジラとともに：東宝特撮VIPインタビュー集』洋泉社、2016年、215-226頁。
- 30 梶山弘子「映画の世界で生きてきた」『わが青春の宝塚映画』宝塚映画製作所OB会有志、2010年、173-174頁。
- 31 佐々木禮子「二十三年目の、レクイエム」『FB：映画研究』第11号、行路社、1998年、71-78頁。
- 32 宮古とく子「我等の生涯の最良の映画 32 思い出深い山本作品」『にっぽん泥棒物語』キネマ旬報 1985年9月上旬号、143-145頁。
- 33 岡野薫子『科学映画にかけた夢』草思社、1999年。
- 26 柳生悦子『日本海軍軍装図鑑―幕末・明治から太平洋戦争まで』並木書房、2003年。